

日本に漂着したアメリカ人達

1. ラゴダ号

嘉永元年（1848 年）5 月 7 日、三艘の舩(長さ 7m 余) で 15 人が松前の北西 30km 程の小砂子村に上陸する。海岸番人が立去る様手真似したら去ったが直ぐに南隣の石崎村海岸に上陸する。此处で食料、薪水を貰い一旦立去るが、再度 5 月 9 日隣の江良町村へ上陸する。役人が度重なる上陸理由を糺したところ、手真似で近海で鯨漁をしていたが親船が破船し 30 人の内 15 人は死亡、15 人が生存の自分達である。母国の船を探して乗せて貰おうと思ったが、どこの船も見懸けず舩では大洋を帰れない事訴える。藩勤番役人も止むを得ず小屋を作り収容し、番人を付け食事を供給する一方、松前藩では藩主が 5 月 10 日に江戸の幕府に報告し指示を待つ。この間一部の者が二度も脱走を繰り返している。

幕府から松前藩江戸藩邸へ 6 月 2 日付札で長崎へ移送する様指示が出されたので上記 15 名を長崎に送る。長崎では同年 8 月 9 日に英語が分るオランダ商館長が聞き取り、オランダ語で口述書を提出する。その日本語訳が記録に残っており、かなり細かい所まで明確になっている。又長崎町役人の記録と思われる記述によれば、この 15 名は非常に無礼で態度が悪く、一部は長崎でも脱走を試み、関係役人も苦勞し止むを得ず最後は全員牢に繋がれたと云う。更に牢内で仲間割れを起こしリーダー格の一人が首を刎られ死亡したが、役所では一応病死とした由である。

幕府は 1 年前のローレンス号と同様にオランダ交易船にバタビヤ(現ジャカルタ) に送還させる予定だった。しかし事前にオランダ交易船が香港付近の米国東印度艦隊に連絡したのか、翌年 3 月に米国軍艦プレブル号が長崎へ引取りに来航した。しかし日本とアメリカは当時国交がないのでオランダ商館経由で彼等漂流民を引渡し、プレブル号は 4 月 5 日出帆している。

漂流民の年齢構成は20歳台前半の漁夫達が多く度重なる暴走の為に入牢となったが、牢に繋がれた事実だけが一人歩きをして、日本は漂流民を虐待していると評判になったものと思われる。

松前での漂流民保護から長崎で米艦プレブル号に引渡す迄約11ヵ月、脱走を繰返すために次第に拘束が厳しくなったが、松前藩初め幕府関係者は彼等を安全に帰国させるべく食事の提供を含め相応に取扱っている。

2. ラナルド・マクドナルド

ラゴダ号乗組員漂着の直後嘉永元年6月2日利尻島に舢舨で一名が漂着した。母船と別れて遭難し小船ではとても帰れない旨手真似で訴えるので、利尻番所から宗谷の藩士勤番所へ引渡され松前藩から幕府に指示を仰いでいる。この時同藩江戸藩邸から秋口になると宗谷勤番所を閉鎖するので、石狩ないし江差に直ぐに移送したい旨の追伸も提出している。

幕府からは長崎へ送るべきだが一先ず江差まで送る様にとの指示が出、7月26日宗谷を出帆している。しかし風筋が悪く江差に入れず松前近くの江良町村に8月10日到着する。

そこで便船を待ち9月6日には長崎に向け出帆しているが、この一名もアメリカ人であり、プレブル号渡来時にラゴダ号漁夫達と共に引渡されている。このアメリカ人は別な捕鯨船の航海士で、船長と口論の末船を下りて舢舨に乗り遭難した事を述べている。長崎でも前述ラゴダ号の漁夫達とは別の寺院に収容されたが、長崎町役人記録ではラゴダ号組とは全く違い礼儀正しい人物となっている。

彼は利尻漂着から長崎でアメリカ船に引渡される迄約十ヶ月程日本に滞在している。

尚このアメリカ人はラナルドマクドナルドと云、長崎で六ヶ月程の滞在期間に森山栄之助初めオランダ通事達に英語を教えた。又日本

に強い興味を持ち最初から上陸予定だったが密入国にならない様に漂着を装った模様等が手記で述べられ、日本回想記として出版されている。

3. ローレンス号

弘化三年（1846 年）4 月 11 日エトロフに異国人 7 名が舢舨で上陸しているのを番人が発見、松前藩勤番所へ届出る。翌 12 日勤番役人が取調べた所、言葉は通じないが手真似で捕鯨船が破船して 14 名の内 7 名は死亡、7 名が漂着した事分る。漂流が長かったと見え飢渴の状態故、粥等与え元気になったら出帆する様に手真似したが、小船ではとても大洋を乗渡り出来ない旨手真似あった。止むを得ないのでエトロフの勤番所で預かって食事を与えているが今後の処理を如何すべきか、松前藩主から閏 5 月 3 日に幕府に問合せしている。幕府の返事が遅かったか更に翌 6 月 12 日に江戸詰の松前藩家来からエトロフは秋以降は船便も絶えるので今の内に同じ遠方でも陸続きの根室か、長崎への移送を考慮し函館に移したい旨伺いを立てている。途中経過は不明だが最終的には長崎へ護送され、オランダ定期交易船でジャワのバタビヤ（オランダのアジア拠点）へ弘化四年（1847）秋に送られ、アメリカ商船か米東印度艦隊かは不明だが引渡されている様である。電話も電信もない時代であり、エトロフ島という辺境から松前、江戸との通信は書状の往復しかなく、又漂流民を船で長崎まで送るのも関係者はたいへんだったと想像するが長崎でオランダ船に引渡す迄 18 ヶ月掛っている。

ローレンス号エトロフ漂着次第

弘化三丙午年五月

私領分東蝦夷地アヘトロツ島之内ルヘツ持場
東浦見張番所より一里半程相隔、字モシユと申
所海岸去月十一日夕七時頃火煙相見へ手招致
候者有之候ニ付、村方之者と相心得村方異人紋
次郎弁吉兩人罷越候所、異国人耄人上陸致
居、磯際ニ而小舟を風除ニ致し葉灌様之物
釣下ケ火を焚居、紋次郎を捕押懷中より何か
取出し懸候ニ付、振放兩人共逃戻相隔見候所、
異
国人四五人相見へ候段、ルヘツ番所江訴出候間
番
人之者同夜勤番所江致注進候ニ付、即刻為
見届、勤番家来共蝦夷江通辞召連、翌十二日

字トシモリ川端迄相越候處、異国人七人上陸
致居同頭立候者耄人病人ニ相見候何等之訳ニ
而
相越候哉手真似ニ而相糺候所、及破船候手真似
致し人数十四人拈打七人海死之手真似ニも候哉
愁傷之体ニ相見候間、見届之者より破船海死
之手真似致為見候所、相懸日数及破船長く
食量差支渴命ニも及候様子ニ而、草根等を
嚙ミ色々手真似致候間、何国ニ而何頃致破船
候哉手真似ニ而相尋候得共、言語一円相分不申
食物薪水等も可遣候間、早々走去候様手真
似を以相諭候得共、頭を振小船ニ而走去候儀
相成兼候手真似、誠ニ餓渴体ニ持合之握飯

飯粥ニなどし相与へ候所、一同歛候体ニ相見へ
候

猶食糧薪水等可遣候間、早々致帰帆候様再

〔大意〕

米捕鯨船ローレンス号の難破船エトロフ
に
漂着、7 名生存

弘化3 年4 月11 日夕4 時頃複数の異国
人

上陸を蝦夷人2 名が発見し番所へ届け、
番所より勤番所へ注進する

翌十二日勤番所役人が取調べた結果
異国人は7 人居り、リーダー風が病気の
様である

言葉が通じないが手真似で以下分る
破船して乗組員14 名の内7 名死亡、生
存

七名の漂流も長かった様で飢渴している
様である。何時ごろ破船して何国か聞
いたが不明。

食料、薪水を与えるので立去る様云った
が

小船では大洋を渡られない旨手真似で
答える。実に飢渴の様なので手持ちの
握飯を粥にして与えたら喜んだ

更に食料与えるので立去る様に云ったが
小船では転覆するので帰れない旨答える
ので止むを得ずフウレツ勤番所へ連れ行
き

<p>応手真似を以相諭候得共、一同頭を振、船ニ指差</p> <p>帰帆致候得は舟覆海死致候手真似を以、頭を振可致帰帆ニ相見へ不申候間、無抛フウレヘツ勤番所江召連、昼夜無油断番人付置、食物手当等致置候由、此上力付候ハ、帰帆之義又々相諭可申候得共、当時之様子帰帆之体ニも相見へ不申、尤舟之義は長サ四間余小筒一挺其外所持之品々之内勤番所江取上預置、猶又追々取調之上委細可申越候段、アヘトロフ島勤番家来共より昨夜私居所江申越候、爰許家来共之内出立</p> <p>申付、猶又嚴重取扱候様申遣候、此段御届申上候、以上</p> <p>閏五月三日松前志摩守</p>	<p>昼夜番人を付け、食物用意した。元気になったら帰帆する様にいったが今のところ帰る様子もない。船は四間程(7m余)</p> <p>の舁です。鉄砲一挺その他所持品は勤番</p> <p>所で預かっており、詳細分り次第報告する</p> <p>以上がエトロフ勤番の家来からの報告ですが</p> <p>松前から家来を出発させます</p> <p>閏五月三日松前志摩守</p>
--	--

エトロフからの移送伺い

<p>弘化三丙午年六月十二日御用番青山下野守様御勝手ニ而差出方、御用方迄問合之上差出候所</p> <p>御預置相成申候</p> <p>志摩守より御届申上候エトロフ島之内江上陸仕候</p> <p>異国人之義帰帆相諭候得共不承知之由、然ル所</p> <p>エトロフ島之義は松前表より式百八十里程も相隔渡海場ニカ所有之、例年二百十日後は海上荒く難儀ニ相成通船留り候時節ニ御座候</p> <p>八月頃より翌春三月末迄は書状往復も</p> <p>出来兼候海上御座候、前書異国人共夏海穩之内</p> <p>帰帆仕候内差支無御座候得共、小船之義ニ付弥帰</p> <p>帆不仕候節は、エトロフ島江差置候而は万端差</p>	<p>弘化三年(1846)6月12日、松前藩江戸詰</p> <p>家来から老中青山下野守に提出し受領さる</p> <p>(大意)</p> <p>志摩守より御届のエトロフ島中に上陸した異国人は帰帆する様に説得したが応じない</p> <p>様です。</p> <p>エトロフは松前から280里(1000km余)離れて</p> <p>おり、海路は式ヶ所ありますが、例年秋口に</p> <p>なると海が荒れ通船できず、8月頃から翌3月</p> <p>頃迄は書状往復もままなりません。</p> <p>異国人達は海が穏やかな夏の内に帆</p>
--	--

<p>支可申奉存候、貳百里余ニは御座候得共地続ね モロ場所江引取置候得共秋末冬ニ相成候共差支有御座間敷奉存候、差越ケ間敷奉恐入候得共、万一長崎表江差廻候様相成候節は箱館表江引取置候得ば明早春船路通路出来可申哉ニ奉存候、エトロフ表江差遣候家来取調之上取計方奉伺候而は時節相後レ万端差支可申奉存候、遠境渡海場之儀ニ御座候ニ付帰帆不仕候節之取計方奉伺、彼地江申遣度、此段各様迄奉伺御内意候 六月十二日松前志摩守家来 田島与兵衛</p>	<p>すれ ば問題ありませんが、小船の事で帰帆しない 場合、エトロフに彼等を置くのは不便です。 松前からは 200 里以上離れていても陸続きの 根室に引取れば秋冬にても問題ありません。 先走りで恐れ入りますが、もし長崎へ送る事 になるなら函館に引取って置けば、翌早春 には海路が開けると存じます。 エトロフに派遣した家来の調査を待った上では時期遅れになると思われます。 辺境の地ですから、若し彼らが帰帆しない場合の処理に付いて現地へ指示致したく、 皆様のお考えを伺いたく存じます。 六月十二日松前志摩守家来 田島与兵衛</p>
以上出典弘化雑記第四冊	
law3 戻る アメリカへの引渡し報告	
<p>嘉永元申年四月 オランダ風説書 一当年来朝之阿蘭陀船五月廿五日咬留巴表出帆仕 海上無別条、今日御当地江着岸仕候、右壺艘之外類船無御座候 一「タイワン」其外日本近海に於て唐船見掛不申</p>	<p>嘉永元年のオランダ風説書によれば アメリカ漂流民は弘化 4 年(1847 年)10 月 5 日 長崎出帆、10 月 29 日ジャカルタ着、嘉永元年 3 月 1 日(1848 年)アメリカに送る * 交留巴＝バタビア、現ジャカルタ オランダのアジアにおける拠点 * 瓜哇＝ジャワ</p>

候 一去年御当地より十月五日帰帆仕候 「スヘルトーゲンホス船号日数廿四日経、 無滞同月廿九日交留巴着船仕候 一去年御当地より御送相成候「アメリカ」人三月朔 日 「アメリカ」江向ケ差送り申候 一瓜哇中物静ニ御座候 右之外相替風説無御座候 カビタン よふぜふへんりいれいそん 右之通、船頭・へとる阿蘭陀人トかひたん承り申 候付、和解差上申候 申六月廿九日大小通詞 出典嘉永雜記第貳冊	*カビタン、かひたんオランダ商館長 *へトル：商船事務長、荷物責任者 ローレンス号7名の経過 弘化3(1846)4月11日エトロフ漂着 （移送の経過不明） 弘化4(1847)10月5日オランダ船で長 崎発 国内滞在約1年半
---	--